



1 aigo Fujii

藤井敬三先生をおくる

世紀の節目とも言うべき2000年3月末日をもって藤井敬三先生が静岡大学教育学部を定年退官されることとなった。静岡大学に来られる以前の先生は、1960年春に東北大学理学部地学科を卒業されて以降、通産省工業技術院地質調査所ならびにその関連諸機関において、一貫して金属鉱床資源や石炭を中心としたエネルギー資源に関する調査、研究を、日本はもとより、世界各地を視野に入れて行っておられた。

このような研究が進展していくなかで、資源利用の将来や、排出ガスや汚染物質による地球環境への影響についての問題は先生を深く憂慮させ、それ故に1991年10月に教育学部の環境科学講座の教授として赴任されたのであろう。先生は赴任直後から当時発足してまだ日も浅く、行方も定かではなかった、教育学部の総合教育課程自然環境コースの中心として課程ならびにコースの運営に腐心される一方、自然環境コースおよび教員養成各課程の理科専攻や、さらに理学部に至るまでの多くの学生達の教育と、特に静岡県を中心とした各地の水資源を中心とした様々な環境に関するテーマの研究に尽力されて来られた。先生の本当の気持ちとしては、好きな研究を大学の落ち着いた雰囲気の中で続けたいというものであったろうと拝察される。しかし全国的な大学改革の嵐が吹き荒れる時代の、あたかも荒波の真只中で翻弄され続けていく教育学部の中に飛び込まれた形となったのである。先生はそのような事態にも関わらず、全学再編や学部の改変についての一つの軸として、体制作りの中心としての労を払われていかれた。また教育学部卒業生の就職問題が重大な結果を招くことを早い時期に察知され、就職に関する学部全体の関心が未だ低かった時期に、学生・就職委員長として、就職に対する学部の教員スタッフ並びに学生諸君の意識の変革を緊急に進めなければならないという必要性を説かれて、ガイダンスを始めとする就職に関する体制変革への端緒を開かれるなど、教育学部に多くの功績を残された。豪放磊落で開放的な面を持ちながらも、実に繊細な気配りされる先生は、暖かな人柄の伝わってくる独特のユーモア溢れる陽気な語り口を持たれていた。静岡との最初の関わり合いであった戦争中の学童疎開を「楽しそうに」語られたこと、膨大な鉱床をチームリーダーとして発見されたサウジアラビアでのお話し、また、厳寒のモンゴルでの思いがけなくも日本との友好親善に尽くされたいきさつのお話しなど、思い出は尽きない。学生達とのコンパでも実に楽しく歌や芸を披露なされるなど、分け隔てなく人に接せられる人柄そのもので周囲を和ませてください楽しませていただいた。本年四月以降は充電期間をとり、しばらくは悠々自適の日々を過ごされると伺う。遠からずお元気で御活躍下されるお姿を再び見せて下さるようお願い、また、我々自身も先生お得意のキーワード「地域から全地球へ」、「持続性ある発展へ向けて」努力していくことを誓って感謝の言葉としたい。

2000年3月23日

教育学部 地学教室
大塚 謙一